

望岳山荘

にて

連休をひかえた「市

民タイムス」の文化面に、台湾の映画『悲情城市』が中劇シネサロンで上映されるという解説記事が載っていた(四月二十六日付)。

一般にはまだ知られるところの少ない侯孝賢(ホウ・シャオシェン)監督のこの感動的な芸術作品が松本で上映されることを知って、さすが松本は文化都市だとひそかに喜び、また、後述するように、そのタイミングが絶好であることに、私は大きな意義を認めざるを得なかった。東京では昨年来、映画愛好家のあいだで好評を博したばかりか、日比谷の小劇場

シャンテ2で記録的なロング・ランが続き、現在でも池袋の文芸座で上映が続いているはずである。

本紙の記事も述べていたように、この映画は一九四五年の終戦によって日本統治を脱した台湾の旧軍港都市(城市)基隆(キール)を舞台

に林家を襲った非運の物語を描い

たものであり、89年ベネチア映画祭グランプリ金獅子賞という最高の榮譽に輝いた、侯監督の代表作である。そして、この作品が注目されたのは、主人公やキャストをクローズアップすることなく、時間の推移と日常性を淡々と描写するドキュメンタリーなショットを

駆使して観客に迫るといふ、いわば記号論的なリアリズムに徹した侯監督の才能とともに、大陸から来た国民党系の「外省人」が在来の「本省人(台湾人)」を弾圧した一九四七年の二・二八事件という歴史の隠された悲劇を時代背景として

映画『悲情城市』の再上映を

追求したそのドラマ性にあつたといえよう。二・二八事件が永い間のタブーを破ってこのようなかたちで再現されたのは初めてであるがこの事件こそは、今日の台湾民衆の心の底にわだかまりつづけてきた重大な出来事であった。

周知のように今日の

台湾は、アジアNIE Sの中でもっとも経済発展の著しい地域であり、一人当りGNPは八五〇米ドルと中国大陸の三十倍近くにも達している。こう

した経済発展とともに、蔣介石独裁体制から蔣経国權威主義体制を経て、今日の李登輝

民主体制へとの見事な政治発展を遂げ、七〇年代初頭以来の国際的孤立を脱して、いまや台湾の存在をめぐりにアジア太平洋時代を語り得なくなってきた。この四月末に、いわゆる「中国敵国案項」を廃止して、さうに二段と民主化を進めつつある李登輝総統は、この

ような英断に先立つ去る三月四日、二八事

件の真相調査と犠牲者への処置という画期的な方針を提示し、台湾内部の心理的亀裂を修復する重要なステップを刻んだのであった。

このように見てくると、『悲情城市』の松本での上映は、きわめて意味深いものといえよう。上映期間は二日間のみであったのに、かなりの入場者があつたことなので、できればもっと長期間にわたって是非再上映してほしいものである。この映画は、最近の台湾がその経済的・社会的発展とともに、文学や音楽など様々な芸術分野で著しい進展を見せていることの反映であることも言を俟たない。

(中島嶺雄・東京外大教授)